都市河川の楽しみ方

広島大学　大学院工学研究科　○学生会員　長津義幸　金城信隆
広島大学　大学院工学研究院　正会員　日比野忠史
京橋川かいわいあしがるクラブ　代表　山本恵由美
中国電力株式会社　正会員　樋野和俊

1. はじめに　太田川は，広島市内において太田川放水路と市内派川（旧太田川，天満川，京橋川，元安川，猿猴川）に分流し瀬戸内海へと注ぐ一級河川である．広島市はこれら太田川の派川によって形成されるデルタ地帯を中心に発展してきており，古くから人々は川や水辺を活用し生活の中に取り込んで豊かな暮らしを築いてきた．京橋川，猿猴川は広島駅に面し，その流れは平和公園へと続いていく観光ルートでもある．広島市内派川は「水の都」を象徴する水辺であり，都会の雑音を消し，風景を彩る，安らぎの場となっている．**写真-1** は太田川放水路でのカヌー遊び，本安川での灯篭流し，京橋川でのオープンカフェを撮ったものであるが，広島市内派川ならではの都市河川の利用がされている．

(a) 太田川放水路でのカヌー遊び

(b) 本安川での灯篭流し

(c) 京橋川でのオープンカフェ

写真-1　都市河川との出会い

2. 都市河川を利用した地域づくり　成熟した都市での地域づくりは住民を中心とした活動に依存するのみでは難しい．その中で，地域に根付いた活動は中心となって活動するボランティア団体によって支えられているのが現状である．ボランティア活動は活動する人々の意欲が原動力であり，行政，企業の支援は限定的である．

京橋川かいわいあしがるクラブは「川に近づき，川を利用し，川で遊び，美しい川を創る」をモットーに平成17年2月に発足している．「あしがる」にはこの周辺に広島城下の足軽が住んでいた歴史があること，芽吹きを促進させるためアシを刈る活動をすること，そしてフットワーク軽く動いて界隈の人たちを巻き込みたい，という思いがこめられている[1)]．クラブの活動は地域づくりの一貫となる「楽しく環境保全・環境教育」が中心であり，その例として，**写真-2**に示す「川辺でピクニック～遊･学･食で楽しもう」，「水辺に親しもう－カヌーに乗って漕ぎだそう」，「アシ刈り大作戦with青空講座－川に関する勉強会」，「干潟でミニとんど」等が行われている．地域づくりは人と人との繋がり，繋がる場所が必要であり，都市河川を利用した地域づくりには「自然豊かな河川」が繋がりの場としての役割をもつ．しかしながら，都市機能の成熟に伴って河川や河川周辺の水辺空間の魅力が低下し，市民が河川を親しみ楽しむ場や機会が失われつつあるのも現状である．

河川や水辺空間の魅力低下の大きな要因の一つとして，河岸干潟に流れ着き堆積した生活排水の存在がある．また，近年の核家族化や地域コミュニティの弱体化によって市民が河川を楽しむ機会が失われていることも，人の暮らしと河川を隔てる要因の一つとなっている．国・広島県・広島市は，水辺の魅力を戦略的・計画的な向上のための「水の都ひろしま」構想を平成15年より策定している．この中で，平成23年には河川敷地占用許可準則が改正され，河川を中心とした空間のオープン化を進めており，水辺空間に対する価値は全国的にも高まる機運はある．都市河川を取り巻く社会的環境は近年大きく変化しており，人々の暮らしと河川の在り方は転機を迎えている．本論文では「都市河

環境学習１　川辺でピクニック～遊･学･食で楽しもう

環境学習２　水辺に親しもう-カヌーに乗って漕ぎだそう

環境学習３　アシ刈り大作戦 with 青空講座－川に関する勉強会

環境学習４　干潟でミニとんど

写真-2　環境保全･環境学習の状況

川を利用した地域づくり」を実現するため都市河川を楽しむことについてまとめた.

3.　都市河川を楽しむ

3.1　理想的な都市河川の在り方　　理想的な都市河川には，河川と水辺空間が魅力的であることが何より重要である．魅力的な空間には人が集まり親しみ利用し，そしてにぎわいが生まれる．その結果，河川や水辺空間は暮らしの一部となって，人々が河川に対して抱く意識や関心は高まり，更なる都市河川の魅力向上に繋がっていく．この自立した循環こそが理想的な都市河川の在り方であり，市民が楽しむことで都市河川の魅力は更に向上すると考える.

3.2　民・官・学，そして市民に求められる役割　　近年の財政難の定常化や事業仕分け等による予算の影響から，抜本的な河川環境整備を実施するのは困難である．このような状況において前述の自立した循環を繰り返していくためには，民・官・学，そして市民それぞれに異なる役割が求められる．民・官・学はハードとソフトの両面から市民が都市河川を楽しむことができる環境と機会を提供していく必要があり，市民には積極的に都市河川を楽しむ姿勢が求められる．

4.　都市河川の楽しみ方　−都市河川を楽しむための取り組みの事例−

4.1　河岸から望むまちの風景　　広島市内派川は護岸がほぼ垂直に落ちているため，川辺が視線に入りにくい．また，潮汐差は大潮時には 4m もあるために満潮時には水面のみが視線に入りやすい特性もある．京橋川には雁木と呼ばれる船着場があり，水辺が近いにもかかわらず，雁木を利用する歩行者は非常に少ない．これは人口の集中やゲリラ豪雨等近年の人間活動に起因して処理しきれなくなった生活排水が市内派川に流れ込み河岸干潟にヘドロ（**写真−3**）として厚く堆積したことが大きな原因である．ヘドロはその上を歩き難いという親水性の低下のみならず，景観の悪化や悪臭の発生，生物生息環境を悪化させるなどといった様々な形で河川の魅力を喪失させている．このよう状況のなか広島県では，様々な形で河川や水辺空間の魅力を損ねているヘドロに対して石炭灰を再利用したヘドロ浄化材（ハイビーズ）を用いた河岸整備を実施することで，都市河川を楽しむための環境整備に取り組んでいる[2)]．ハイビーズは中国電力株式会社の開発した環境修復材であり，環境修復効果は広島大学で実証されており，民・官・学が一体となった環境再生を目指すための技術である．**写真−4** には市内派川の一つである京橋川において実施された事例の概要とハイビーズの適用状況を示している．ハイビーズは，ヘドロの分解促進効果や悪臭の原因である硫化水素の発生抑制効果，ヘドロの酸素消費能力を低下させる効果，生物多様性が向上する効果等が確認されている．これらに加え，今回のような河岸干潟への適用後はヘドロの硬度が向上することでその上を歩いて河川に近づくことが可能になり，河岸から街の風景を楽しめるようになった（**写真−6**），実際に環境整備後の干潟上を歩いて水際まで近づき遊んでいる子供や干潟状から釣りをする市民の姿も見られた（**写真−5**）．

写真−3　広島京橋川干潟に堆積したヘドロ

写真−4　Hi-beads による河岸整備の状況

写真−5　親水性向上

4.2　都市河川を感じる，そして都市河川を使う

都市河川の魅力を感じる（見る，聞く，香る，触れる，味わう）機会は，生活の中に溢れている．例えば，都市を流れる河川や水面に映し出される街並み，生活の中にある自然などといった景観を見ることは都市河川の楽しみ方の一つである．また，市街地において川を中心とした自然に生きる鳥の鳴き声や川が創り出す音は，都会の喧騒を忘れされてくれる．感潮河川であることから河川から香る潮や磯の香りも都会の中で自然を感じさせてくれる．あるいは，カヌーや釣りなどのように河川に直接触れて楽しむこともできる．食を通した楽しみもあり，市内派川で収穫されるヤマトシジミはブランド化され水産業の中心を担っている．

また，京橋川をはじめとし，広島市内に約 300 か所ある雁木を水上交通の船着場として活用して，雁木タクシー[3)]が運航されるなどの，都市河川を利用することで河を身近に感じる取組みがなされてきている．またオープンカフェや水辺でのコンサートなどのように，河川や水辺を何かをするための空間として間接的に利用することでも河川は暮

写真-6　河岸から望むまちの風景

らしの中に取り込まれていく．

5. おわりに　　川を楽しむことは川を思うことから始まる．川が臭いとか川が汚いなどといったネガティブな感情でも何でも，川に対して何かを感じて思うことから川（自然）の環境改善は進む．川を思い関心を抱いていれば，何か機会があった時に川を楽しむ一歩を踏み出す勇気やきっかけになる．

(1) 環境事業への強制・競争・共生　　自治体は体験学習やワークショップ等，積極的に開催しているが，そこに参加するメンバーの顔ぶれは変わらないことが多い．これは環境への個人意識の問題だけではないように感じる．初めて参加する場は萎縮するものであり，このハードルを越えるのが結構大変である．思い切って参加して新たな体験が得られれば，環境問題に興味がわくものである．地域づくりへの取組みにおいて「関心」→「体験」→「楽しみ」の仕組みがうまく回れば，『自然学習を通した地域づくり』は実現するかもしれない．

(2) 腑に落ちる集い　　昨今の社会は，明確な指揮命令系統のもと階層構造から導かれる職務を基準に活動されていることが多いと感じている．ビジネス的には至極当然なのかもしれないが，地域づくりでは，そこに住む人々の平滑は交流が不可欠である．それぞれに思いがあるなか，全ての意見を集約することは困難である．しかし，わいわいと話を進める中で，最後には「そうだよな」，「まあいいか」といった，気持ち的に府に落ちる場面がある．100%では無いものの納得（府に落ちる）できた組織はスムーズにまわりだす．府に落ちない状態で動きだしているのが今の状態ではないでしょうか．まずは，市民の集いの場が必要ではと思う．広島でも各種イベントが開催されており，大きなものでは「フラワーフェスティバル」や「フードフェスタ」があげられる．これらのイベントが活気あるのはなぜか．そこには魅力の場の提供とともに，経済活動の場が存在するからである．地域づくりは，どうもボランティアといったイメージがついている．このボランティアイメージを利益も生み出さすイメージに変えられないものか考えていきたい．

(3) 水を楽しむルール　　環境行政に携わる人に聞いたことがあるが，水辺の開放にあたっては，水難事故等のことを大変危惧されている．例えば河岸を公共の場として提供することが可能となっても，それを公共の場として提供ばかりに，生命に危険がおよんだとなっては，担当者も委縮されるのも納得する．市民が自然を楽しむために自らのマナーを育て，その普及を図っていくことは当然必要である．幼少のころからの自然教育や自然体験が水を楽しむマナーを育んでいくのだと思う．

参考文献

1) もりめいとクラブＨＰ（あしがるクラブ http://www.morimate-ch.com/），
2) 広島県 http://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/99/1295232461023.html，
3) 雁木タクシーＨＰhttp://www.gangi.jp/，